大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古 No. 16

森園遺跡 3

大野城市教育委員会

解説シート「森園遺跡２」で取り上げた森園遺跡の弥生時代の墓地の縁に当たる部分で、幅約２m、長さ 35 m 以上、深さ約 60 ㎝の大きな溝状の遺構が確認されました。右の１がその溝の一部を写したものですが、溝の底から弥生時代中期後半の甕棺墓と同じ時期のたくさんの土器が出てきました。

これらの土器は、当時の日常に使われていたものと異なった独特な形をしたものが多く、作り方も丁寧で、土器の表面が赤く塗られていました。なかには、土器の頸の部分を打ち欠いていたり、底に穴があけられたりなどの、一種の加工が加えられていたものも見られました。

このことから、この溝から出てきたたくさんの土器は、弥生時代の祭りや儀式に使われていた土器ではないかと考えられています。

1

2

3

しかも墓地のすぐ近くから出てきますので、死者に対する何らかの祭りに使われた土器ではないかと思われます。

このような祭りに使った特殊な土器を墓地の近くに埋める例は、弥生時代に大きな甕棺を使って死者を埋葬する風習があった九州北部で時々見られますが、森園遺跡のようにたくさんの土器がまとまって出てくる実例はそれほど多くなく、貴重な資料です。

4

2・3・4は、土器の出土の状態を近づいて撮影したものです。たくさんの土器が重なるようにして出土しているのがわかると思います。このような状態で、溝の端から端まで土器がぎっしりと埋まっていました。

下の5はこの溝の中から出土した代表的な土器を、一部選び出したものです。

後列の左側2点は同じ形をした壺です。帯状の飾りをつけた独特な形の土器です。左の壺は頸から上がわざと割られているため残っていません。何かのまじないをしたものと思われます。どちらも表面には赤い丹が塗られた痕が見られます。その前の土器は頸の長い壺で、口の部分は袋のように丸められた優美な形をしています。表面には丹がかなり鮮やかに残っています。前列の中央は頸のない壺（下）とその蓋（上）です。それぞれの口の部分には、紐を通すための穴がつけられています。下の壺には何かのまじないのためでしょうが、わざと丸い穴があけられています。表面には丹が塗られています。後列の右端は甕です。これにも表面は丹が塗られています。前列の右端の2点は、小型のかわいらしい壺です。

5